

内田クレペリン精神検査の作業曲線の型と Y-G検査の性格特性との関係

須 見 喜 六

I 研究の目的

内田クレペリン精神検査は作業曲線の型から Personality の特性を診断しようとする検査法であるが、この検査の結果の作業曲線の型と内省にもとづく矢田部ギルフォード性格検査(Y-G)の結果の性格特性とはどのような関係があるであろうか。

たとえば作業曲線に激しい動揺を示すものは情緒不安定の性格特性の現われであると云われているが、(4) 動揺の少ないものよりも Y-G の特性において情緒不安定の方へ偏るものが多いであろうか。

また逆に Y-G の特性において情緒不安定の方へ偏りを示すものは情緒安定的な方へ偏るものよりも作業曲線において激しい動揺を示すものが多いであろうか。

動揺の因子のみならずその他の作業機能因子である初頭努力、興奮、休憩効果等についても Y-G の12の性格特性の何れと関係が深いかを明らかにしようとするのが本研究の主目的である。

内田クレペリン法は Kraepelin の研究をもとに内田勇三郎が標準化したものであり、(4)(10)(15) Y-G 検査は Guilford の研究にもとづき矢田部達郎らが標準化したもので、(1)(4)(14)何れもわが邦で独特の発展をとげた検査であり、両検査の関係について従来外国で研究されたものはないが、わが邦では既に加藤正英(7)石川啓(2)板倉善高(5)らの研究がある。

加藤正英らは作業曲線の後段の中高傾向についてのみ Y-G との関係を検討しており、石川啓らは25分法により男子100名について因子分析的研究を行っており、板倉善高は家事サービス業志望者のみについて Y-G の標準点の平均の比較を行っている。

本研究は女子短大生215名について作業検査は30分法により行い一つ一つの作業機能因子について前段後段共に非定型な群と定型的な群とを比較し、差の検定を行って曲線型の違いが Y-G の特性に如何に現われるか、また逆に Y-G のプロフィール型の違いが作業曲線に如何に現われるかという両方向から総合的に相互の関係を研究しようとするものである。

II 研究の方法

1. 被 験 者

岡山県立短期大学女子学生215名

(内訳保育科1年47名2年40名、看護科1年43名2年44名3年41名)

2. 検 査 用 紙

内田クレペリン精神検査はO型用紙を使用

矢田部ギルフォード性格検査は成人式を使用

3. 教 示 方 法

内田勇三郎著改訂版内田クレペリン精神検査法手引および辻岡美延著 Y-G 性格検査実施手引による。(4)(15)

4. 検 査 期 日

昭和42年11月17日より翌年7月16日まで

5. 検 査 場 所

被験者の所属する教室において学級毎に集団検査した。

6. 判定結果の分類整理方法

判定は手引の通行ったがその結果を次の通分類整理する。

- (1) Y-G プロフィール型別に作業曲線の定型と非定型の分布を見る。
- (2) 作業曲線の前段後段共に初頭努力を欠く群と前段後段共に初頭努力の明瞭なる群の Y-G 性格プロフィールを比較する。両群共に各特性の粗点の平均を算出しプロフィールを描く。
- (3) 作業曲線の動揺が前段後段共に大なる群と小なる群の性格プロフィールを比較する。また Y-G 「気分の変化」 1 のものと 5 のものの両群の作業曲線における動揺の度合を比較する。
- (4) 作業曲線の興奮が前段後段共に大なる群と定型群の性格プロフィールを比較する。
- (5) 作業曲線の休憩効果の無い群と定型群の性格プロフィールを比較する。
- (6) 作業曲線の前段後段共に平坦なる群と定型群の性格プロフィールを比較する。
- (7) 作業曲線の前段後段共に上昇を示す群と定型群の性格プロフィールを比較する。
- (8) 作業曲線の前段後段共に下降を示す群と定型群の性格プロフィールを比較する。
- (9) Y-G 性格プロフィール型 A 型 B 型 C 型 D 型 E 型別に平均作業曲線を描いて比較する。
- (10) Y-G プロフィール型 C 型と D 型を併せて情緒安定群とし B 型と E 型を併せて情緒不安定群として両群の平均作業曲線を描いて比較する。
- (11) Y-G プロフィール型 B 型と D 型を併せて積極群とし C 型と E 型を併せて消極群として両群の平均作業曲線を描いて比較する。

Ⅲ 結 果 と 考 察

1. Y-G の性格プロフィール型別に作業曲線の定型と非定型の分布を示すと表の 1 の通である。 表の 1 Y-G プロフィール型別作業曲線型分布

作業曲線型 Y-G プロフィール型	定 型	準 定 型	準々定型	疑 問 型	異 常 型	計
A	a'2	a'2	a'f3	f(A)3 f(B)1		11
A'		a'3	a'f10 f'f3	f(A)1		17
AB	a'1	a'5	a'f17 f'f1	f(A)1 f(B)2		33
AC	a'2	a'6	a'f14 f'f1	f(A)3		26
AD		a'2	a'f13	f(A)4		19
AE	a'1	a'5	a'f4	f(A)2		12
A'			a'f2	f(A)1		3
B			a'f6	f(A)1		7
B'		a'3	a'f11	f(A)4		18
C		a'1	a'f7	f(A)3		11
C'		a'6	a'f3	f(A)2		11
D		a'5	a'f9	f(A)3 f(B)1		18
D'		a'2	a'f5	f(A)2		9
E		a'1	a'f8 f'f1			10
E'		a'2	a'f6	f(A)1		9
F(疑問)	a'1					1
計	7	43	124	41		215

異常型に属するものは1名もいなかった。

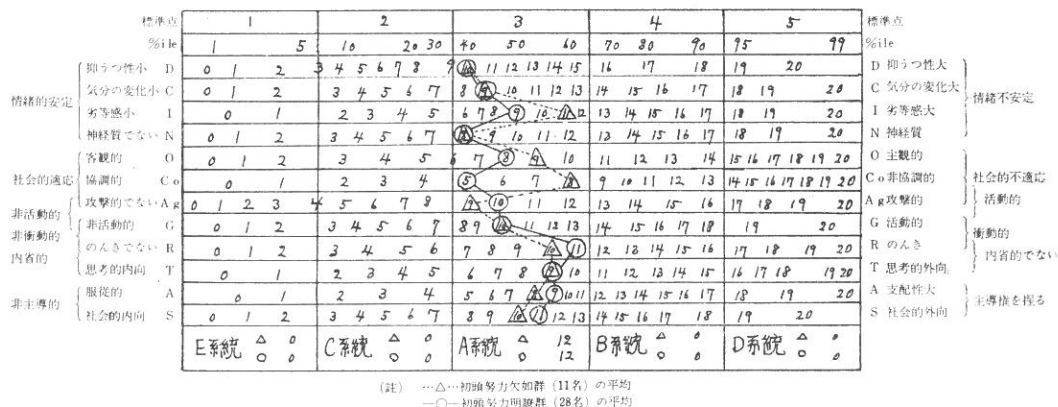
疑問型については一部分しか再検査しなかった。看護科1年生43名を対象に入学試験時の曲線と比較したところ曲線型において殆んど2回目の曲線型と一致したので再検査を省略したのである。

表の1を見れば明らかな通、A(平均型)だから定型が多いということはない。

(有意差なし)B型(右寄り型)C型(左寄り型)D型(右下がり型)E型(左下がり型)の何れかが非定型が多いということもない。

2. 作業曲線の前段後段共に初頭努力の明瞭なるもの(28名)と前段後段共に初頭努力の欠如しているもの(11名)を選んでY-G性格特性別粗点の平均をとり両群のプロフィールを描いて比較すると図の1の通である。

図の1 初頭努力欠如群と明瞭群の比較



予想に反して各特性共に標準点における差が見られなかった。

3. 作業曲線の前段後段共に動揺の大なる群(9名)と定型群(7名)のY-G性格特性別粗点の平均によりプロフィールを描いて両群を比較すると図の2の通である。

図の2 動揺の大なる群と小なる群の比較



動揺が大と云っても何れも疑問型の程度であって異常型に入るものはなかった。

表に示す通、標準点に差の見られたのはG(活動性)のみであって動揺大群の方が定型群より活動性大なる方へ一段階偏っているがt検定による有意の差はない。

次に逆にY-G特性「気分の変化」1なる群(12名)と「気分の変化」5なる群

(17名)の作業曲線における動揺度を比較すると表の2の通である。

表の2 気分の変化大なる群と小なる群の作業曲線の動揺度の比較

群 別	動 揺 度	定 型	準 定 型	準々定型	疑 問 型	計
気分の変化5の群		1	7	8	1	17
気分の変化1の群		5	1	3	3	12
計		6	8	11	4	29

$$\chi^2=9.831 \quad df=3 \quad P<0.025$$

「気分の変化」大なる群が「気分の変化」小なる群より激しい動揺を示す曲線が多いということはない。定型だけを見ると気分の変化小なる群の方が多い。

4. 作業曲線の前段後段共に興奮の大なる群 (20名) と定型群 (7名) の Y-G 性格特性別粗点平均によりプロフィールを描いて両群を比較すると図の3の通である。

図の3 興奮大なる群と定型群との比較

標準点	1	2	3	4	5	標準点
File	1 5	10 20 30	40 50 60	70 80 90	95 99	File
D	0 1 2 3	4 5 6 7 8 9	10 11 12 13 14 15	16 17 18 19 20		D
C	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		C
I	0 1	2 3 4 5	6 7 8 9 10 11 12	13 14 15 16 17 18 19 20		I
N	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12	13 14 15 16 17 18 19 20		N
O	0 1 2	3 4 5	6 7 8 9 10	11 12 13 14 15 16 17 18 19 20		O
Co	0 1	2 3 4	5 6 7 8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		Co
AK	0 1 2 3	4 5 6 7 8	9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		AK
G	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		G
R	0 1 2	3 4 5 6	7 8 9 10 11 12 13 14 15 16	17 18 19 20		R
T	0 1	2 3 4 5	6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20			T
A	0 1	2 3 4	5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20			A
S	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		S
E系統値 △ 0 C系統値 △ 0 A系統値 △ 12 B系統値 △ 0 D系統値 △ 0						

(註) …△…興奮大なる群 (20名) の平均
—○—定型群 (7名) の平均

加藤正英らの研究では後段の中高傾向の群と定型群とを比較してS (社会的向性) 等に有意差のあったことを報告しているが、そのような差が見られない。

5. 作業曲線に休憩効果の見られないものは3名しかいなかったが、定型群 (7名) との Y-G 性格プロフィールを前項同様の方法によって描いて比較すると図の4の通である。

図の4 休憩効果小なる群と大なる群の比較

標準点	1	2	3	4	5	標準点
File	1 5	10 20 30	40 50 60	70 80 90	95 99	File
D	0 1 2 3	4 5 6 7 8 9	10 11 12 13 14 15	16 17 18 19 20		D
C	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		C
I	0 1	2 3 4 5	6 7 8 9 10 11 12	13 14 15 16 17 18 19 20		I
N	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12	13 14 15 16 17 18 19 20		N
O	0 1 2	3 4 5	6 7 8 9 10	11 12 13 14 15 16 17 18 19 20		O
Co	0 1	2 3 4	5 6 7 8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		Co
AK	0 1 2 3	4 5 6 7 8	9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		AK
G	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		G
R	0 1 2	3 4 5 6	7 8 9 10 11 12 13 14 15 16	17 18 19 20		R
T	0 1	2 3 4 5	6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20			T
A	0 1	2 3 4	5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20			A
S	0 1 2	3 4 5 6 7	8 9 10 11 12 13	14 15 16 17 18 19 20		S
E系統値 △ 0 C系統値 △ 1 A系統値 △ 10 B系統値 △ 1 D系統値 △ 2						

(註) …△…休憩効果小なる群 (3名) の平均
—○—休憩効果大なる群 (7名) の平均

標準点に差の見られるのはR（のんきさ）とD（抑鬱性）であって、休憩効果のない群の方がのんきで抑鬱性は小なる方へそれぞれ一段階偏っているが、t検定による有意の差はない。

6. 作業曲線が前段後段共に平坦型を示す群（7名）と定型群（7名）とのY-G性格プロフィールを比較すると図の5の通である。

図の5 平坦群と定型群の比較

標準点	1					2					3					4					5					標準点	
%ile	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99	%ile	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99
D	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						D
C	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						C
I	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						I
N	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						N
O	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						O
Co	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						Co
Ag	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						Ag
G	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						G
R	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						R
T	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						T
A	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						A
S	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20						S
E系統値 $\Delta 2$					C系統値 $\Delta 1$					A系統値 $\Delta 10$					B系統値 $\Delta 1$					D系統値 $\Delta 0$							

(註) …△…平坦群（7名）の平均
—○—定型群（7名）の平均

標準点に差の見られるのはO（主観性）とAg（攻撃性）であって、平坦型の群の方がより主観的であって、より攻撃的でない方へ一段階偏るがt検定による有意差はない。

7. 作業曲線が前段後段共に上昇型を示す群（5名）と定型群（7名）のY-G性格プロフィールを比較すると図の6の通である。

図の6 上昇群と定型群の比較

標準点	1					2					3					4					5					標準点	
%ile	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99	%ile	1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99
D	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	D
C	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	C
I	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	I
N	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	N
O	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	O
Co	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	Co
Ag	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	Ag
G	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	G
R	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	R
T	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	T
A	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	A
S	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	S
E系統値 $\Delta 0$					C系統値 $\Delta 0$					A系統値 $\Delta 11$					B系統値 $\Delta 1$					D系統値 $\Delta 1$							

(註) …△…上昇群（5名）の平均
—○—定型群（7名）の平均

標準点に差の見られるのはT（思考的向性）のみであり、上昇型群の方が外向の方へ一段階偏るがt検定による有意差はない。

予想では内向に偏るのではないかと考えたが逆であった。

8. 作業曲線が前段後段共に下降型（垂下り型）を示す群（8名）と定型群（7名）のY-G性格プロフィールを比較すると図の7の通である。

図の7

下降群と定型群の比較

標準点	1	2	3	4	5	標準点
%ile	1	5	10	20	30	%ile
D	0	1	2	3	4	D
C	0	1	2	3	4	C
I	0	1	2	3	4	I
N	0	1	2	3	4	N
O	0	1	2	3	4	O
Co	0	1	2	3	4	Co
Ag	0	1	2	3	4	Ag
R	0	1	2	3	4	R
T	0	1	2	3	4	T
S	0	1	2	3	4	S
E系統値	△ 0	△ 0	△ 0	△ 0	△ 0	
C系統値	△ 0	△ 0	△ 0	△ 0	△ 0	
A系統値	△ 10	△ 10	△ 10	△ 10	△ 10	
B系統値	△ 2	△ 2	△ 2	△ 2	△ 2	
D系統値	△ 2	△ 2	△ 2	△ 2	△ 2	

(註) …△…下降群(8名)の平均
 —○—定型群(7名)の平均

標準点において差の見られるのはAg(攻撃性)とR(のんきさ)であり、下降型群の方がより攻撃的で、よりのんきな方へ一段階偏り、AgもRも1%水準における有意の差が見られた。

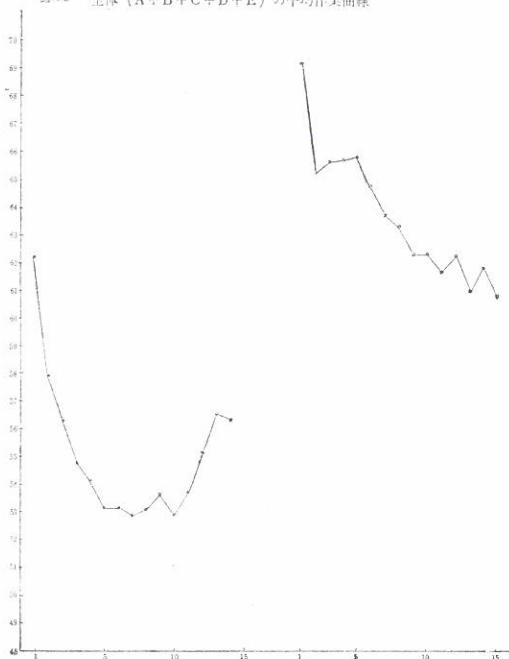
9. Y-G性格プロフィール型 A型(11名) B型(7名) C型(11名) D型(18名) E型(10名) およびその合計(57名)の平均作業量は表の3の通である。

その全体の平均作業曲線を描くと図の8の通であり、各型の平均作業曲線は図の9の通である。

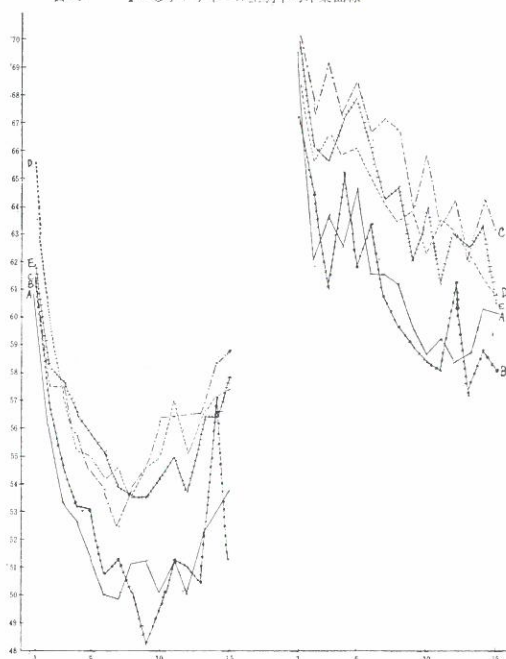
表の3 Y-Gプロフィール型別平均作業量

前段							後段						
行別 型別	A	B	C	D	E	計	行別 型別	A	B	C	D	E	計
1	60.81	61.28	61.36	65.61	61.80	62.16	1	69.72	67.14	70.27	68.44	69.90	69.14
2	56.10	56.71	57.54	59.27	58.40	57.85	2	62.09	64.57	67.27	65.58	66.00	65.17
3	53.45	54.71	57.54	57.16	57.50	56.28	3	63.63	61.14	69.09	66.50	65.50	65.61
4	52.63	53.28	55.81	53.15	56.60	54.80	4	62.54	65.42	67.28	65.93	67.10	65.64
5	51.37	53.14	54.54	55.05	54.80	54.09	5	64.09	61.85	68.45	66.05	67.90	65.77
6	50.00	50.85	53.81	54.22	55.20	53.09	6	61.72	63.28	66.69	65.05	65.40	64.74
7	49.81	51.29	52.45	54.66	53.90	53.11	7	61.72	60.57	67.09	64.16	63.30	63.66
8	51.27	50.86	53.90	53.63	53.60	52.88	8	61.09	59.71	65.81	63.50	64.70	63.22
9	51.56	48.28	54.72	54.61	53.60	53.05	9	59.54	58.85	63.81	63.93	62.00	62.09
10	50.18	50.57	56.49	54.87	54.30	53.63	10	58.63	58.42	65.90	62.33	63.90	62.11
11	51.36	51.29	56.07	57.05	55.00	52.94	11	59.18	58.00	63.27	63.52	61.60	61.61
12	50.81	51.00	56.18	55.01	53.70	53.70	12	58.45	61.28	64.09	63.00	63.00	62.12
13	52.63	50.57	56.63	56.58	56.50	55.07	13	58.72	57.14	62.00	62.00	62.50	60.86
14	53.00	57.14	58.45	57.11	56.50	56.47	14	60.27	58.85	69.17	61.52	63.30	61.77
15	53.81	51.42	58.81	57.44	57.80	56.33	15	60.10	58.00	63.00	60.93	60.70	60.77

図の8 全体 (A+B+C+D+E) の平均作業曲線



図の9 Y-Gプロフィール型別平均作業曲線



各型の曲線は概ね前段はU字型、後段はやや右に傾いた格好のW字型を示す点に共通傾向は見られるが、とりわけ目立っているのはB型の前段9行目の下降と14行目の突出、後段の下降傾向と12行目の突出等である。

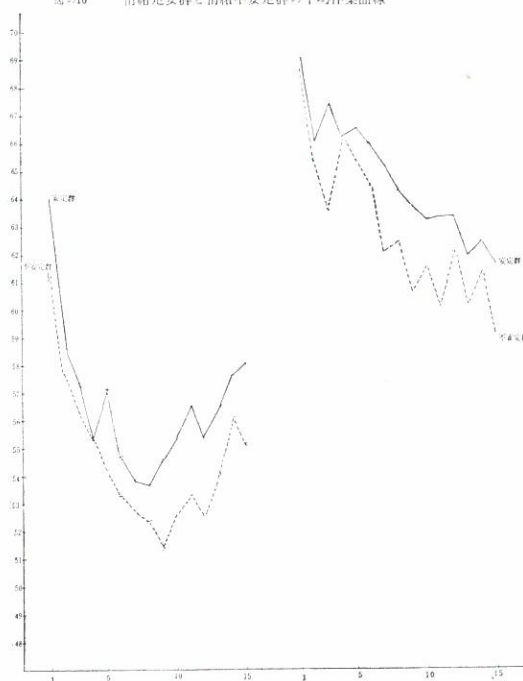
しかし後段 (15行) の各行の平均を基準として常態指数を算出してみると A型 +0.594であり B型にあって +0.545と何れも +0.5を超しており全般的に定型からの偏りは少ないことがわかる。

10. Y-G性格プロフィール型 C型とD型を併せて情緒安定群としB型とE型を併せて情緒不安定群として両群の平均作業曲線を描いて比較すると図の10の通である。

不安定群はB型とE型を含むのでその特徴である前段9行目の下降と14行目の突出等が見られ、後段においても全体にやや下降傾向を示しつつ4行目の突出がやや見立つ。

11. Y-Gプロフィール型 B型とD型を併せて積極群としC型とE型を併せて消極群として両群

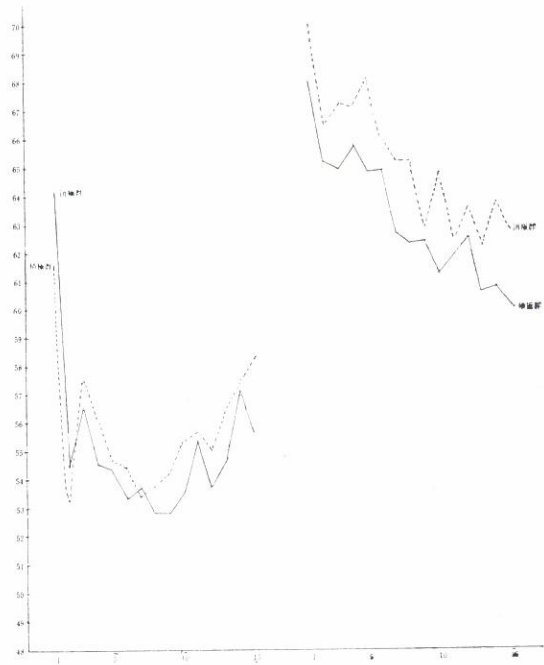
図の10 情緒安定群と情緒不安定群の平均作業曲線



の平均作業曲線を描いて比較すると図の11の通である。

積極群はB型を含むためにやはり前段14行目の突出と後段全体の下降傾向の特徴が見られる。

図11 積極群と消極群の平均作業曲線



IV 要 約

内田クレペリン精神検査の作業曲線の型と Y-G の性格特性との関係を探究するために短大生215名に両検査を行い作業機能因子別に典型的な偏りのある群と定型群の Y-G プロフィールを比較すると共に Y-G プロフィール型別に平均作業曲線を描いて比較したところ次のような結果が得られた。

1. A型（平均型）に定型が多いということはない。また B, C, D, E 型の何れかに非定型が多いということもない。
2. 初頭努力欠如群および興奮大なる群は定型群との間に Y-G 特性に標準点の差が見られない。
3. 定型群との間に有意の差の見られるのは下降型群のみである。下降型群の方が定型群より攻撃的でのんきな方へ標準点一段階偏る。
4. 動揺大なる群は定型群より Y-G 特性「活動的」の方へ 標準点一段階偏るが有意の差はない。 Y-G 特性「気分の変化」5 のものが 1 のものよりも作業曲線に動揺が多いということはない。
5. 休憩効果小なる群は大なる群より「抑鬱性」小なる方へ、そして「のんきさ」はのんきな方へ標準点一段階偏るが有意の差はない。
6. 作業曲線平坦型群は定型群より「主観的」な方へそして「攻撃的」な方へ標準点一段階偏るが、有意の差はない。
7. 上昇群は定型群より「思考的向性」が 外向の方へ 標準点一段階偏るが有意の差はない。
8. Y-G プロフィール型 A, B, C, D, E の各型の平均作業曲線の特徴が明らかにされた。たとえば B 型は前段14行目の突出と 9 行目の陥没等が目立つ。

9. 情緒安定群と不安定群の平均作業曲線の特徴が明らかにされた。たとえば不安定群には前項のB型とE型の特徴が併有される。
10. 積極群と消極群の平均作業曲線の特徴が明らかにされた。たとえば積極群の方が消極群より後段にやや下降傾向を示す。

以上の結果から作業曲線における如何なる偏り方が Y-G の12の性格特性の何れとかかわりが深いかおよび Y-G の性格プロフィールの型によって作業曲線に如何なる違いが見られるかが明らかにされた。しかし本研究では典型として前段と後段の両方に同種の偏りが見られる群をとりあげて定型群と比較する方法をとっており、前段のみあるいは後段のみに偏りのある場合または前段と後段とに異種の偏りが見られる場合等については今後の研究にゆずる。

加藤正英が報告しているような後段の中高傾向群と定型群との差は本研究では認められなかったが、被験者に著しい偏り(P)のものがなかったことも考慮に入れなければならない。本研究は自己評価にもとづく性格特性との関係を研究したが、他者評定にもとづく性格検査の結果の特性との関係については時を更めて検討したい。また職場適応と作業曲線との関係についても保育科第一回卒業生が職場に出て一定期間経過後の時点において研究することとしたい。

参 考 文 献

1. Guilford, J. P., & Martin, H. G. 1943 Personnel inventory. Beverly Hills, Calif.: Sheridan Supply Co.
2. 石川 啓 1959 多相的集団ロールシャッハ検査の作製 (5) — Y-G, クレペリン, 京大NX知能検査との因子関連性について — 日本心理学会第23回大会発表論文集
3. 伊藤 格夫 1960 内田クレペリン作業曲線の因子分析的研究 心理学研究 31, 103~113
4. 井村 恒夫 1963 臨床心理検査法 医学書院 34~45 63~73
5. 板倉 善高 1962 Y-Gテストと加算作業との関係 日本応用心理学会第29回大会発表論文集
6. 板倉 善高 1963 作業性格検査解説 雇用問題研究会
7. 加藤正英・香川隆子 1958 クレペリン内田作業素質検査の曲線型の Y-G性格検査による検討 関西心理学会
8. 柏木 繁男 1962 内田クレペリン検査の作業曲線について 心理学研究 33, 98~100
9. 柏木 繁男 1964 内田クレペリン検査の信頼性と妥当性の客観的手法による検討 心理学研究 35, 93~95
10. 相馬 紀公 1949 内田クレペリン精神反応検査の数量的取扱 日本精神技術研究所
11. 杉山佳行・石橋富和・杉村健・道広明德 1960 矢田部ギルフォード性格検査のプロフィールに示された非行少年の特徴 大阪精神衛生, 1960, 5, 21~26
12. Thurstone, L. L. 1951 The Dimensions of Temperament. Psychometrika, 1951, 16, 11~20
13. 辻岡 美延 1952 内田クレペリン検査の因子分析的研究 大阪少年鑑別所 鑑別 1952, 4
14. 辻岡 美延 1968 新性格検査法 天理時報社
15. 内田勇三郎 1951 内田クレペリン精神検査手引 日本精神技術研究所

昭和44年3月31日出稿